ヤングパワー登場

和

丸山 栞和（かんな）

この度、お話をいただいて何を書こうか考えたところ、私のこれまでの道程と春日丘高校を象徴するものとして「和」というものがふさわしいと思い至りました。そこで、これから三つの「和」について書かせていただきます。

一つ目の「和」はやはり人との繋がり、絆です。昨年は天災が相次ぎ、絆というものが改めて考え直された年でした。相手を思いやる、受け入れる、このようなことは言うのは簡単ですが、本当に実行するのはとても難しいことです。しかし今、振り返ってみるに我々春高生はこのことを心から理解していたように思います。春日丘を象徴するともいえる「藤蔭青春を」ですが、この歌を歌う時、皆自然に肩を組み輪になって歌っていました。春高生にとっては当たり前のことですが、あれだけのことを当然のように行うことができる高校生は日本にどれほどいるでしょうか。あの瞬間こそが絆であるのだ、そしてまた、あの「輪」の中にこそ「和」というものの本質があるのだと私は思うのです。

私はそのような様々な行事の「藤蔭青春を」の合唱に吹奏楽部の一員として演奏で参加してきました。私は縁あって現在も音楽に携わっていますが、縁とは不思議なもので、今は邦楽部で尺八を演奏しています。二つ目の「和」は調和の「和」です。邦楽と吹奏楽では大きく違うと思われるでしょうが、音楽の本質は同じであると私は思います。その本質とはやはり調和であると思います。吹奏楽は指揮者のリードで徐々に調和が生まれます。しかし邦楽は指揮者はほぼいません。ですから各演奏者が互いに呼吸をどこまで感じられるか、が合奏の全てであると言えます。つまり最初から調和を前提としているのです。このようにプロセスは異なりますが、私は西洋も日本も音楽が生む人との繋がり、調和に違いはないと改めて感じました。音楽とは元々神に祈りを捧げるためのものです。全ての人の心が一つになれば、その祈りは届くのだと私は吹奏楽と邦楽の両方から学ぶことができました。

祈りの形は音楽だけでなく漢字というのもその一つであります。三つ目の和は、私がその漢字をもって届けたい祈り、平和の「和」です。私は今後、中国文学を学ぼうと考えています。そのきっかけは、偉大な漢字学者であられた白川静先生との出会いです。私は白川先生の「いつか必ず漢字のもつ力が、日本を含む漢字文化圏の国々の懸け橋となる」というお考えを信じています。そして、この漢字に込められた祈りをより多くの人々に伝えていくことが私の夢でもあるのです。

最後になりましたが春日丘を通して恵まれた全ての出会いと「和」に、また、百周年というまたとない機会にこのような形で再び春日丘に繋がりを持てたことに感謝をお伝えし、締めくくりとさせていただきます。

（神戸大学）

左から2番目が筆者

寄稿

レディ・レイに捧ぐ

岡田 雄二（昭47卒）

奥野務君が死んだ。死亡日時もはっきりしない。平成23年4月8日というのは、警察検視による推定でしかない。急激な血圧低下による突然死だったと発見者の娘さんからは聞いた。

彼とは、高校入学以来40余年変わることなく親友でいた。仕事が多忙な時に数年ぶりに会っても、高校時代の気持ちそのままでモノが言い合える仲だった。そういう友人を、俺は彼を置いて他に持たない。彼もそうだったはずだ。たぶん、そうした仲をずっと維持できたのも、彼も俺も奥さんが春日丘出身で、4人とも同じ青春時代を共有していたからかもしれない。卒業以来、藤蔭会や同窓会にも出たこともない俺だが、あの一緒に馬鹿なことばかりをやった青春時代の春日丘のみんなに、彼の死を報告したい気持ちになって、この追悼文ともつかない雑文を寄稿する気になった。

昭和44年に入学した同期生でクラスも違う10名ほどが、いつの頃からか毎日のように集まり、昼食時は学校近くにあったえびす食堂や焼肉屋、阪急飯店に、放課後は紫煙荘という喫茶店に集まり、ただ何時間もだべって馬鹿話に日々を過ごした。勉強はまったくしなかった。

土曜日ともなると、彼の家に入り浸り、一晩中ジャズのレコードを聴いて過ごした。彼のお気に入りは、オスカー・ピーターソンなどの華麗なスイングジャズでなく、麻薬におぼれてうなり声をあげながらピアノを弾くバド・パウエルやウイントン・ケリーのような黒人の暗く陰鬱な人生を匂わすジャズだった。特に「どや、最高やろ。このヘロインと酒でしわがれた声」と言って、何度も聴かされたのがビリー・ホリディの「Lady IN Satin」のアルバムだった。ゆったりとしたストリングスの演奏。ソロに絡むホーンの調べ。切なさが胸に染みこむような曲ばかりだった。「彼女はな、尊敬を込めてレディ・レイと呼ばれているんや」と言っていた。

卒業後、俺はパリに一年ほどいた。正直に言うと、日本にいるのに嫌気がさしていたのだ。働きたくもないし、勉強もしたくなかった。パリには仕送りもないため学費もまかなえないし、食えなくなったので翌5月に日本に舞い戻った。翌年卒業した奥野務君が、入れ替わるようにヨーロッパに行った。働きたくない病の俺は、一年自宅で浪人生活をして、大学に入ろうともがいたが、もともと勉強していない奴が急に学力を養えるわけもなく、見事に志望校に落ちた。することもなく無為に過ごしていた頃、彼が一年ほどで日本に帰ってきた。

その頃彼の兄貴が、東京でCMカメラマンをしていた。どちらからともなく東京に一緒に行こうと話が持ち上がった。彼の兄貴を頼りに、二人して東京に行った。何かしようというあてがあったわけでなく、今から考えると彼も俺もただ社会に出る勇気も、働いて独立するという気持ちもなかったからに違いない。彼の兄貴のアパートに半分居候しながら、2年間東京で彼と一緒に暮らした。時には喧嘩もしながらの東京生活は、俺が東京に出張で来た親父に呼ばれて「大阪に帰って働け」というきついお叱りで終りを告げた。俺が帰ると程なく彼も大阪に帰ってきた。

働き始めた俺は、程なく結婚したいと思うようになった。家に居たくなかったの